特別支援教育の扉 №２５　　令和４年１１月１５日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「転んだときに　起き上がれる力」

先日、ある中学校の特別支援学級（知的）の生活単元学習「育てた野菜でおもてなし」の授業を参観しました。自分たちで育てた野菜を使い、校内の先生方に野菜スープを作っておもてなしをするという単元です。本時は、「スマイル食堂」開店に向けて、３人の先生方に野菜スープを試食をしてもらい、インタビューを通して分かったことを発表し合う活動でした。

感想を発表し合う場所、カセットコンロで調理をする場所、先生方に試食をしてもらう場所などを分かりやすく設定したことで、生徒が自分の役割を理解して自信をもって活動できました。生徒の質問に対して試食した３人の先生方が丁寧に答える姿と、それを心配そうに見守る校内の先生方の優しい眼差しに、全校で特別支援学級の生徒たちを支えようとする温かい雰囲気が伝わってきました。まとめでは、味の好みは人それぞれ違うこと、具材の火の通りに工夫が必要なこと、食べやすいように具材の切り方に気を付けることなど、インタビューを通して生徒に新たな気付きが生まれました。また、家庭生活と関連付けたことで、生徒から「おー」「あー」など、たくさんの感嘆詞が飛び出すほど、楽しく学びの多い授業でした。

授業全体を通して感じたことを紹介します。３人の生徒がカセットコンロを一台ずつ使って注文を受けた野菜スープを作っていたとき、ある生徒のカセットコンロの火がつきませんでした。カセットにガスが入っているか、コンロのツマミは大丈夫かなど、全て教師が先回りして行っていました。火を扱っているため、安全面が最優先されますが、生徒が課題解決のためにできたことがあったのではないか思いました。子どもには「転ばないように歩く力」よりも「転んだときに起き上がれる力」が必要です。特別支援学級に在籍する子どもたちは、プラスの体験からプラスを学べますが、マイナスの体験（失敗体験）からプラスを学ぶことに困難さがあります。たとえ失敗しても適切な行動を教え、「〇〇できたね」と認める、「◇◇すると〇〇できるんだ」と、どのようにやればうまくいくかを具体的に伝え、よいイメージで終わることで、「転んだときに起き上がれる力」が定着します。子どもが失敗したとき、少ない支援で最大の力を発揮して課題を解決するためには、最後は失敗ではなく、成功体験で終わることが大切です。ピンチを子どもが成長するチャンスと捉えましょう！

とれたて直送便

「保育現場のニーズに応える」

先月下旬、関係機関を通じて「保育現場で役立つ支援ガイド」を各園にメール送信しました。園訪問の際、よく質問を受けた内容を中心に、子どもの困り感の背景と実際の支援（身辺処理・言葉・行動・保護者支援）の項目に分けてまとめました。子どもと保護者の笑顔を増やすために、日々の支援の参考資料として園全体で共有・活用してもらえるとうれしいです。（☺）